

流域情報

あらかわ



VOL. 14

発行●NPO法人荒川流域ネットワーク編集委員会／編集人●鈴木勝行
住所●358-0046埼玉県入間市南峯400-4 FAX04-2936-4120
ホームページ●<http://arariver.org/>



CONTENTS

- ① 都幾川、越辺川で親子体験地曳網を実施
- ② いきもの道・魚の道 入間川の川越・狭山地区における魚の溯上環境
- ③ 森作りの現場から 拡大する鹿の食害 森と水のふるさと秩父からの報告
- ④ Network News
7月の台風で都幾川の矢来堰と鞍掛堰が崩壊 今年も荒川自然再生地でクリーンエイド活動を実施 熊谷市で荒川の高水敷きでクリーン活動を実施
Network Information
荒川流域再生シンポジウムを国立女性教育会館で開催

都幾川の二瀬橋で実施した親子で体験する地曳網の様子。上流側に瀬張り網を張り、川一杯に曳き網を広げて上流に向かって曳く。

都幾川、越辺川で親子体験地曳網を実施

荒川流域ネットワークでは、2011年度も高麗川、都幾川、越辺川の3河川で親子で体験する地曳網漁を実施した。

7月に予定していた高麗川の浅羽ビオトープでの最初の地曳網は、台風の影響で水量が増え、網を曳くことも、子どもが川に入ることも危険な状態になったので、地曳網漁は断念した。

8月13日に計画していた都幾川の槻川との合流点での地曳網漁は、水量も少なく最良の状態では実施することができなかった。地元の嵐山町の他新座市、朝霞市など埼玉県各地から24名の子どもを含む49名の参加者が集まり、快晴の都幾川で地曳網漁を楽しんだ。

子供たちに全員ライフジャケットを着用して、下流側に約200mに移動し、橋に向かって親御さんと一緒に曳き網

を曳いてもらった。

曳き網が浮いて、魚が逃げないようにゆっくり曳いて、二瀬橋近くに設置した瀬張り網に追い込み、さらに曳き網を曳いて狭い囲いを作り、そこに追い込まれた魚を投網で捕獲した。

投網には、上げる度に10尾前後のアユやウグイ、オイカワなどが入っていて、魚の姿が見え度に子どもたちの歓声が上がった。

同じように都幾川と槻川の合流点の上流に瀬張り網を設置して、この日2回目の地曳き網を行った。2回の地曳網で、14尾のアユの他、大量のウグイを捕獲できた。アユの中には、私たちネットワークが遡上環境調査のためアブラビレを切除した標識アユが1尾含まれていた。



越辺川今川橋での地曳網漁実施の様子。

9月17日には、越辺川の今川橋上流でも親子での地曳網体験イベントを開催した。こちらも13名の子どもを含む42名の参加者があった。

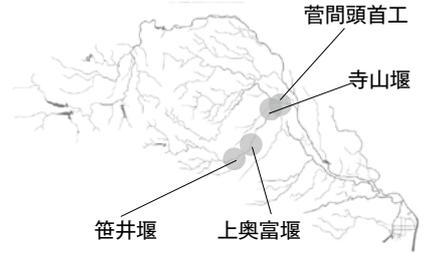
300mの区間を2回に分けて瀬張り網を張り、上流への魚の退路を断って親子で網を曳いたが、川底の床固めのコンクリートの凹凸があったり、流速が少し速く、曳き網が浮いたりして、目指していたアユは捕獲できなかった。

地曳網漁は水量に左右され、難しい漁法だが、来年も開催する予定である。

入間川の川越・狭山地区における魚の溯上環境

笹井堰上流まで魚を溯上させるため これから取り組むべきこと

■報告<荒川流域ネットワーク副代表> 鈴木勝行



2011年10月5日の上田知事のブログに以下のような記述があった。

*

昨日、県議会の一般質問で和田浩議員から質問を受けました。内容は、入間川の菅間堰で、せっかく海から遡上したアユがそれ以上、上れないという問題があるという指摘であります。

《途中略》

和田議員の質問は、このような中で農業用水を確保するのか、それともアユが遡上できるようにするのかというどちらか一方の選択ではなく、両方可能にならないかという提案でありました。近年造られた堰の多くには立派な魚道が整備され、これら両方が可能となっています。

しかし、古い堰には農業用水の確保ということだけを目的としたものが多くあります。こうした古い堰でも大がかりなことではなく、何とか両立させることはできないのか担当部局に検討させました。その結果、全く不可能でないことが分かってきましたので、私は早速この菅間堰で、アユが遡上でき、なおかつ農業用水の取水もできるような改良をやりたいと思っています。

菅間堰を一つのモデルケースとして、上流まで天然アユが上ることができるなど魚が自由に行き交い、なおかつ先人が造った農業用水を取水する堰の機能は維持するという一挙両得な堰の改良を県内各地で実現していこうと考え



現在溯上改善計画が進められている菅間堰

ております。
《以下略》

*

私たちネットワークは、2007年6月に入間川の菅間堰とその上流にある堰の現地調査を実施し、2009年4月には菅間堰上流からアブラビレを切除した標識アユを放流し、溯上状況の調査を行なった。

また、同時に川の再生事業地として入間川、越辺川水系にある13の横断構造物を対象として、その溯上環境の改善を求める申請を行うとともに、県知事に菅間堰とその上流の堰の溯上環境



の改善を求める意見書を提出した。

県が行なった川の再生100プランでは、小畔川の1ヶ所以外は採用されなかったが、菅間堰の改善については県の農村整備課と協議を続けてきた。

来年から始まる埼玉県の新たな「川の再生」事業は、市町村の申請をもとに線と面で整備を行うことになり、魚道設置などにより、一定区間での溯上環境を改善できる可能性が出てきた。

現在溯上が困難になっている入間川及び越辺川水系の流域環境を埼玉県にも要望を出しながら、関係機関の協力と理解を得て、溯上環境の改善に取り組んでいきたい。

そこで今回は、アユの標識放流調査により得られた結果から、入間川の川

越市、狭山市にある取水堰等の現状と課題について記してみたい。

最下流にある菅間堰は、昭和24年に改修され、現在の形になったが、下流側の洗堀の進行等で、2m以上の落差が発生している。堰自体が古く傷んでいるため、本格的な魚道の設置は困難なため、左岸側の堰下に溯上可能なスロープを造る方向で検討が進められている。

菅間堰の約4km上流には、寺山堰がある。魚道はなく、通常は通年土砂吐けに堰板が置かれており、全体に1m前後の落差があるために溯上が困難な状態にある。2009年に実施したアユの標識放流調査の時は、水利組合に了解してもらい堰板を2週間外させてもらった。その結果、多くのアユが寺山堰を上っていったことを確認できた。

寺山堰の500m上流にある浅間堰は、国による許可取水堰になっているため、魚道はないが5月中旬まで堰板が外されており、落差も30~40cmと少ないため下流に留まることなく上流に上っていったことが確認されている。

浅間堰から約9km上流に狭山市が管理している上奥富堰がある。造られた年月日は不明だが、洗堀により下流側に150cm以上の落差が発生し、2009年のアユの標識放流調査では、この堰の下流側に、ほとんどの標識アユが留まっていたという結果が得られ、この堰がアユの溯上障害物になっていると考



調査のため堰板を外す作業を行なった寺山堰



7月の台風で崩壊した上奥富堰

えられた。今年7月の台風で堰の中央部が崩壊し、現在狭山市が国に対して災害復旧を申請中である。

上奥富堰からさらに約2km上流に田島屋堰がある。魚道がなく、1mほどの落差が発生しているため、平水時には魚の溯上は難しいと思われる。



左岸側に魚道がある笹井堰

田島屋堰から1.5km上流に豊水橋床固め工がある。左岸側に階段状の魚道が設置されているが、堰から突出しているために魚が見つけれず堰下に留まる可能性があるのではないかと予想されたが、2010年に田島屋堰上流から行なった標識放流調査では、床固め

工の下流に一部留まっているアユも確認されている。

そこからさらに900m上流に笹井堰がある。2010年の標識放流調査でも笹井堰の下で8尾と捕獲数が1番多く、堰下に留まったアユが多かったという結果が出た。左岸側に魚道があるが、堰の下流端に1mほどの落差ができていることと、魚道にたどり着くまでにいくつかの障害があり、現状では魚道を魚が利用することは困難ではないかと思われる。

標識放流調査結果から、これらの堰の溯上環境を改善できれば、飯能市域まで溯上が可能である考えられる。



シカによって樹皮が剥かれた落葉樹林

捕獲を積極的に行っていますが、なかなか思ったような成果も見られないのが実情です。シカを含め野生動物には人が定めた県境がないので、秩父地域のみで捕獲を試みても、県境を越えて他地区へ移動してしまうので、思ったように捕獲できません。そこで周辺都県と協力し一斉に捕獲作業を実施する等苦心しているようですが、食害の影響を阻止できる適正頭数までの捕獲は困難なようです。

秩父地域では、最近は山の管理を針葉樹林から落葉樹林への転換を計るための植林も積極的に行っています。ところがせっかく植林した落葉樹の幼木も、シカの餌になってしまうケースが多発しています。そこで幼木にプラスチックチューブを巻き、シカによる食害防除対策にも積極的に取り組んでいます。また、農作物被害への対策は農地を電気防護柵で囲み大型動物の侵入を阻む工事等も進められています。

人と動物が棲み分けられる一日も早い抜本対策の確立に、期待が高まる此の頃です。

森づくりの現場から Vol.11 森と水のふるさと秩父からの報告

拡大する鹿の食害

NPO法人秩父の環境を考える会
金田安生

多くの人々が秩父を訪れて感じることは、自然豊かな暮らし易い里であると思われるようです。しかし、広大な秩父地域の山林を中心に、里山に隣接する農地までもがシカ、猿、イノシシ等の野生動物の猛烈な食欲を満たすために甚大な被害を受け、森林の荒廃や里山に隣接する農地の不耕作化が急速に進行していることに気付く人は少ないようです。

とくに増殖するシカによる食害は深刻です。国有林である奥秩父の森林の落葉樹を中心に大木の表皮が剥がされ、水の供給機能が失われた大木の立ち枯れが目立つ地域が拡大しています。さらに、里に降りてきたシカによる農作物被害も深刻です。作付けされた作物が収穫直前にシカの餌になってしまい収穫ができないという被害地域が拡大していることも地域の大きな問題です。このことで農家の生産意欲が失われ、

結果的には不耕作地の増大に拍車をかけるといふ悪循環に陥りつつあるのが秩父地域の実態なのです。

シカが増殖した主な原因は

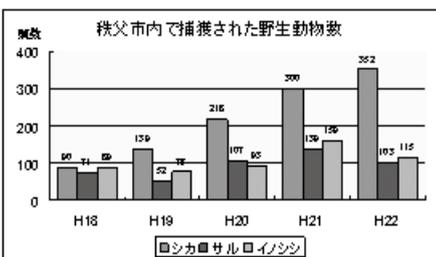
要因としては次のようなことが考えられます。

- ①天敵の消滅…シカの天敵はオオカミ等の肉食動物。明治時代に人を襲うと言う誤った風聞により狩の対象となって激減、消滅した。
- ②冬でもエサの確保が容易となった…昔は大雪で餌が確保できず多くのシカが命を絶たれたが、温暖化の進行により冬でも餌の確保が容易になった。
- ③猟師の減少…狩猟を生業とする猟師が減少するとともに、狩猟を趣味として楽しむ人達が減少。

以上のような要因が重なり、シカの出生数に見合う捕食と捕獲数が激減したために、爆発的な増殖につながったと考えられます。

食害に対する対策は

では何か対策はないのでしょうか。埼玉県はシカや猿、イノシシ等の生息数の調査を行い、自然環境化で生息できる適正数を超える固体の狩猟による



NetWork News 1

7月の台風で都幾川の矢来堰と鞍掛堰が崩壊。災害復旧申請へ。

今年の台風は、紀伊半島などに甚大な被害をもたらしたが、都幾川でも矢来堰と鞍掛堰でも、堰の中央部が増水で崩壊した。両堰とも蛇籠に石を詰めた構造の堰のため、水圧で囲っている鉄線が切れ、石が抜けて崩壊した模様である。

矢来堰は、2010年の都幾川でのアユの標識調査の時、その下流で溯上が確認

された最上流の堰で、落差は約2m、斜度も40度ほどだが、蛇籠の堰のため水が透過してしまい、魚が溯上するのは難しいと思われる。

矢来堰は、現状復旧が原則の災害復旧事業に申請しているため、魚の溯上環境を改善することは期待できない。魚を都幾川の上流部まで溯上させるために



は、溯上環境上重要な堰なので、荒川流域ネットワークとしては、環境改善に向け、関係機関に対して理解と協力を得るよう、働きかけていきたい。



自然再生地でのクリーン活動に参加された彩の国いきが大学伊奈学園第17期校友会の方々

NetWork News 2

今年も荒川太郎右衛門自然再生地でクリーンエイド活動を実施。処分が困る投棄物も。

今年も11月5日に川島町にある荒川太郎右衛門自然再生地で、彩の国いきが大学伊奈学園第17期校友会有志の方11名と荒川流域ネットワークのメンバー3名の合計14名で清掃活動とゴミの調査活動を行った。3年前と比較するとゴミの量は、4分の1ぐら

いに減っているが、未だにトラックでゴミを運び込んでいる様子がみられる。

テレビなどの粗大ゴミに混ざって骨壺が投棄されていた。後日届けた警察から中は空であったという連絡があり、周辺に散骨した後に投棄したとも考えられるが、寒々しい光景であった。

NetWork News 3

熊谷市で1,698人が参加して荒川の高水敷き6ヶ所でクリーン活動を実施

荒川を歩こう！荒川をきれいにしよう！荒川で触れ合おう！をキャッチフレーズに、第14回「荒川の恵みと熊谷を考える集い」が、11月13日に63団体1,698名の市民が集合して行われた。

クリーン活動を行なったのは、熊谷市域の荒川本流両岸4kmの河川敷の6箇所である。

午前中の2時間であったが、拾った

ゴミの量は可燃、不燃、粗大ごみ合計25tだった。

今迄は毎年増加していた参加者が、此の頃は漸く減少気味に転じている事は、市民の皆さんの荒川に対する愛着心が高まっている事と担当者一同、感謝している。

河川環境問題を標榜する私達にとって幸先の良い事なので河川清掃を継続



して市民の皆様が安心して集える賑やかな場所の更なる構築に務める事を誓い合った。(報告/岡里)

編集後記

今年度のアユの標識調査は、台風による度重なる増水で、思うように調査ができず、仕方なく増水の中で行なうなど、危険を感じながら投網による調査活動することも何度かあった。

4回予定していた地曳網も2回は増水により曳ける環境ではなかった。川で安全を確保しながら行事や調査活動することの難しさを思い知らされた夏だった。

今年の台風では、荒川流域の少なくとも3つの農業用取水堰が崩壊した。今後緊急復旧事業として復旧することになるが、法律上以前の状態に戻すことが決められてという。折角高額な税金を投入して修復すのだから、環境を改善することも可能な法律に変えられないものだろうかと歯がみすることも多かった。(鈴木)

NetWork Information 1

荒川流域再生シンポジウムを2月19日に嵐山町の国立女性教育会館で開催

第16回の荒川流域再生シンポジウムを来年も開催する。会場は国立女性教育会館。13時開場、13時30分開始で、17時まで開催予定である。

今年度、流域再生プロジェクトが行なったアユの標識放流調査の結果報告とそこから見えてきた入間川、都幾川、越辺川、高麗川の溯上環境の課題について報告し、来年度の計画も提案する。

また、新河岸川水系におけるアユの生息環境保全の取り組みを新河岸川水

系連絡協議会から紹介して頂く予定。

埼玉県の水環境課が手がけている河川の環境を、その魚を食べてみるなど人の五感を通して評価する手法についても、紹介して頂こうと考えている。

その他、今年度行なった水質一斉調査についても報告する予定。

流域での天然アユの復活と地曳網の体験事業などアユ漁復活の進め方などについても参加者全員で幅広い議論をしたいと考えている。